

一編舎十九と十返舎一九

―現代語訳「異船早魅神評定」「虫看鑑野辺若草」―

横 尾 文 子

はじめに

佐賀県立図書館の「近世資料編さん室」では、『佐賀県近世史料』を一九九三年より二〇〇九年の現在に至るまで宮々と十七巻刊行されている。この労多い仕事に対し全国の研究者や図書館から多大なる賛辞が寄せられ続けているが、一般県民には熟知されてこなかった向きがある。

そのような中、二〇〇四年刊行の「第九編第一巻」に収められた「一編舎十九シリーズ」は愉快で面白く、これらの作品こそは一般読者に供し、その醍醐味を共有したいものがあつた。試みに、佐賀女子短期大学オープンカレッジで「乱世のオドケ 十返舎一九と一編舎十九」（二〇〇九年六月四日）の演題で紹介したところ、〈葉隠の里〉にこのような武士が存在したということに受講者は驚かれ、感嘆の声が挙がっていた。そこで、両名の作品から各一編を選び現代語訳を施して、更なる普及活動の一端としたい。底本としたのは次の書である。

一編舎十九と十返舎一九

「異船早魅神評定」（『佐賀県近世史料 第九編第一巻』）

佐賀県立図書館、二〇〇四年）
「虫看鑑野辺若草」（『十返舎一九全集 第四巻』
日本図書センター、二〇〇一年）

一編舎十九（いっぺんしゃじっく）の略歴

佐賀藩士。通称、蒲原大蔵^{かもはらだいぞう}。天明三年（一七八三）生まれ、安政四年（一八五七）没。享年七十五歳。相良敬真（相良求馬家）の二男、五歳で父に死別。十五歳で藩校弘道館に入るが放校処分を受け、十七歳で兄の真栄に従って江戸へ出京。のち、蒲原孝古の養子となり蒲原孝栄を称す。文化五年（一八〇八）二十五歳、フェルトン号事件の責めを受け養父自刃。大蔵も召しつぶされ三年の浪人生活の後、文化八年二十八歳で再出仕し、物成百三十石の平士となる。文化十一年（一八一四）三十一歳、四十石加増。その後、着座（家老に次ぐ家格）を仰せつけられ三十石加増。

文政十八年（一八三〇）二月七日、藩主鍋島齊直が引退して直正

の治世となったため、一週間後に致仕（四十八歳）。この後、「一編舎十九」の筆名で戯作をしたためるようになる。

「異船早魅神評定」は蒲原大蔵七十歳で草した作品である。

『佐賀県近世史料 第九編第一巻』の監修者である田中道雄氏は、同書「解題」において

「大蔵の作品に凜として貫く一つの精神は『葉隠』に登場する先祖たちの豪胆な心を受け継いでいると考えてよい。相良求馬が盗みをした家来を許したと記す『葉隠』の条には、家来たちに、「博奕を打ち、虚言をいへ。一町の内、七度虚言いはねば男は立たぬぞ」と戒める武士の話が出る。全うに生きるだけでは大業は成らぬ、というのである。十編舎一九をもじって一編舎十九を名乗る大蔵には、卑下の片鱗も認められない。大蔵は、猿真似ではない虚言を連ねて、「葉隠武士の滑稽本」を作ったのである。地方文芸の傑作と呼ぶに値する。」

と評されている。

異船早魅神評定（いせんかんぱつかみひょうじょう）

一編舎十九

「五日の風十日の雨」とは、五日に一度風が吹き十日に一度雨が降ればすべて順調の意である。その天候が不順なときは、たとえば人間がお腹に病をかかえているみたいなので医師が病状を察して薬を施すように、それをうまく治せば善いのである。嘉永六年（一八五四）五月、雨が期待の七分目ほど降った後、晴上がったが、

それより今日までもう八十日に及んで潤いがなく、近ごろでは田畑は言うにおよばず処によっては人馬の命にも差しさわりの早魅に見舞われ、畑作物はみな日照りで枯らしてしまい、民に食糧はなく、大異変が起ころうとしていた。このような次第で、諸山諸寺での祈禱はさまざまに尽くされたものの靈験なく、今後行末はどうなるかと人々は恐怖におそわれておった。このような折も折、東にはアメリカ、西にはロシアの船が入って来て、いろいろに難題を要求し、しまいには強訴に及ぼうとする兆しがあらわれている。

関東は言うにおよばず全国各地の領主は、固唾をのみ刀をとぎ矢に羽根をつがえて戦さの準備をする時世となって、すでに修羅の巷と化すかと危ぶまれている。この前代未聞の珍事により、日本中の神々が金立社の社頭に集まって、首を傾け手をこまねいての合議と相成ったのである。

諸神「時に御亭主。早魅・異国船の二大事件はいずれも軽からぬ変事であります。まず、さしあたっては早魅の一件、そのままに差置いては人命にも差し障ること、どのようにいたしましうぞ。今日の集会には、取るにたりない末社から靈験薄い藪神にいたるまで集まってござる。思いついたことは何もかも包み隠さず談合しないと、望みがかないませぬ。どなたにとっても取分け重大事にちがひありませんが、まず御亭主役として、金立社はどうなってお考えでござるか。」

金立社「拙社（拙者）といたしても此節の早魅、これまで神としての立場上、様々に神配（心配）いたしましたが一向に降雨がござらぬ。一般的に、雨乞いのことは古来より順序次第があつたとおり

で、病の軽重により医師が薬を扱うごとくに、まず最初は諸社諸山が祈禱をなし、それでもって熱を取り去り、それから徐々に下痢をとめ、病の軽重によって薬を用いて快方に導くような順序次第がござった。そのように、最初は村々の浮立を三回離し、七回離し、十三回離し、三十三回離し、それでも雨が降らないときは市中の浮立を離すと必ず降雨となった。それでも願いが届かないとなると、拙者が有明海の「沖ノ島」⁶⁾にまで出かけて、ついに雨は無事に降ったのでござる。それなのに最早すべての手数も済んだ本日になっても、靈験なく、もう施す手立てはなく、お互いに神配（心配）のごとでござる。一体全体前にも申したとおり、雨乞いの儀式は段々次第の階級があるというのに、このたびは物事が前後し、市中の浮立も済まないうちに拙者が沖ノ島参りへと移り行ってしまった。全体的な順序としては、最初は村浮立、それから市中浮立へといたるうちに、拙者が近国の肥後阿蘇嶽・雲仙岳・そのほか高い山々の雲や霧を集め、雨水をこしらえ、いつごろには雨を降らそうかと手配いたすものである。が、今回はその半ば、まだ村離子を三回しか済ませていない思いがけない処へ、村の氏子どもが不意に来て、無理に拙者の腕をとらえて引つ張り出し、有無をいわせず「神輿」⁷⁾に押し込み、山を下り、道中では音楽といつても川上実相院の「経参り」の笛がヒコヒコと鳴るばかりの下手糞笛で拍子もそろわず、ただ拙者を諸富の「浮盃」⁸⁾まで連行さへすればよいとばかりに心得、道を急ぎ、ひたすら走って旅の病人を搬送するかのようになり、あるいはアメリカから黒船がやってきたと注進を急ぐ早馬の走りのようなものであった。道中、これまでは宿所宿所で神前飾りをいたして暫く休息し

一編舎十九と十返舎一九

たものだが、それもなく御城下の市中も素通りでござった。ときに拙者は、不意に山を出たもので、「三ッ溝」⁹⁾あたりより、不図、大便の兆しに襲われてしまった。御城下に入ったら休息の折にこそ用便を果たそうと心積もりし、道を急ぐのも宜しかろうと考えておったのに、前に述べたとおり市中では神前飾りが一向にない。仕方なく堪えに堪えて「江上町」¹⁰⁾のあたりでは殊のほか差し迫り、もう神輿を汚すほかないと思つたのであるが、これは「修理田の山王社」¹¹⁾より借りた代物なので用便ができずじまいであった。そうなれば、好いも悪いもない。足の力カトで尻を塞ぎ堪えておったのだが、下腹がひどく痛んできて一遍はゴロゴロと鳴ってせきが治つたが、すぐさま便が穴際にまで詰め寄せまして、懸命に拳を握りしめ、顔は平家蟹さながらに青くなったり赤くなったり、その苦しみ、お察しください。神輿の内なので自分の苦しみだけで済んだが、これを人に見られたら末代の恥辱でござった。

山王「ハハハハハ すんでのところだ拙神が神輿は、貴神の雪隠（便所）と相成るところでござった」。金立「ハハハハハハ それからというものを道を急ぎ、ようやく無事に浮盃に到着いたすより早く手水（便所）¹²⁾に参り、存分の出糞。まことに妊婦が出産したかのようには疲れはて、なかなか降雨の心配どころではござらぬ」。諸神「ハハハハハ そのときの貴神のつら（顔）が見たいものでござった。ハハハハハ」。

金立「一体に、所々での神前飾りと申すのは全く休息のためばかりではござらぬ。しばらく休息などしているうちに、在地の信者が散銭を持ってきて武運を祈りますれば、その散銭をもって、次はい

つ機会に恵まれるか分らぬ雨乞だから、それまでの当社の維持費としていただくものであれば、この節の幸福（神のお下り）ではおよそ散銭もこれほどはあるだろうと心の内で胸算用しておったのに、目論見違ひとなり、さてさて困った按配じゃ」。

諸神 「ごもつともにござる。浮立も御沙汰どおりにすれば順序が前後いたし、降雨の手配はくいちがうし、金立さんの目論見も見当違ひとなり、お思ひのほどはもつともにござる。それにしても、貴神はまた不思議なことがお好みで、どうしても浮立でなければ雨の手当てはいたさぬなどと、何やら子供のようにござる。鐘や太鼓を叩き回らなくとも庄屋そのほか夜どおしの祈禱などをいたしましたら、それで御心配はなさそうなもの。どうしても浮立でなければならぬと申されるのは、子供がダダをまきちらすようなもの。金立さんも、お好きにござるなあ。ハハハハ ぞふたんのごたある（冗談のようだ）。ハハハハ」。

白石 稲佐大明神 ⁽⁹⁾ 「アイヤアイヤ、そのように嘲りをおっしゃいますな。拙神もやはり浮立狂言で降雨の手配をいたしてまいり、まったく浮立でなければならぬと申す訳でもござらぬ。とは申せ、一般的に五風十雨整わないのは天地人の三ツが和合いたさぬところから、片降り、片照りをいたすものでござる。浮立狂言をいたせば人気も和らぎ、それに随って天地が和合し降雨いたすことは、理の当然というものでござる。

金立 「同意見に存じます。総体的に、浮立の鐘・太鼓を打立てますと、拍子と音律とが和合いたしますので、雨気があつまり、雲霧が起こり、いかなる青天も雨に変わるものでござる。すべてすべ

て、拙者が山に籠もって鐘・太鼓を打立てるからだけではござらぬ。どこにても笛・太鼓の拍子が連続いたしませば前に申したとおりでござる。その証拠には、この山のふもとにおります（一編舎）と申すオドケた親父が若いころ江戸に居たとき、何とやらいった町に能楽の太鼓の先生をいたす者があって、その技量は超絶しており部屋の中で気を入れて太鼓を打つと部屋のはこりがすべて太鼓台の下に煙のように集まる¹¹⁾と申します。もつともあの親父も少々スラゴト（嘘）を申しますけれども、考えてみると、音に感じほこりが集まるというのは満更偽りではありません。そのほかにも例があり、浮立の笛も一声に吹きたてますから音律が和合してたちまち笛を吹き割ったのを、先年どこだったか、浮立奉納のときに眼前で見たことがあったそう。馬鹿馬鹿しいようではあるが、こんなことも併せて考えると、浮立奏樂で雨の気分が引き立つことも無いとは申されません。今回の浮立、何もかも事が前後してしまつた上、庄屋や別当が『や、や、そこでは打つな。ここでは叩くな』と申すので市中の者どもは恐れ半分疑い半分で、打つてよいのやら叩いてよいのやら判らず、たとえて云うならばドモリの鬼が豆を打つようなもので、鬼になつても出るべきなにか入るべきなにか判らず、門口にまたがり疑惑いたしているような事態でござる。ハハハハハ」。

諸神 「いかにもご尤もでござる。それならば、今一度、市中浮立を打たせたいものでござる。しかし只今、將軍徳川家慶御逝去のため鳴物停止のお触れがでおりますから、それも叶いませんでしょう。金立「鳴物停止とあつても、それは天変地異に対する人事の表向きの建前、これほどの異変は人命にもかかわることであつて決

して私事ではありませぬぞ。少しも遠慮には及びますまい。しかし折悪しく長崎にロシア船がきており、こんな折に拍子木を叩き『しやアおい』などと狩場で法螺貝ならぬ尺八を吹き鳴らすような似つかぬことでは、なんとも不都合。出来ることなら、市中の者どもに、番外編の裁可として心のままに躍り狂わせ、そこで人氣が浮き立ちましたら、たちまち雨気は引き立ち降雨も間違いないでございませぬでしょう。このような大事なことは所詮、我ら下々の神が千万申したところで天に届くところではござらぬ。この節の雨乞浮立は、町方では久しぶりのこと、それぞれに衣装など最大限の張込みようでございます。非常事態の時節柄、このような事になりますと、その日暮らしの者までもが「明日は野となれ 山となれ」とばかりに少しも頓着しないで大金を使っております。こればかりは我藩市中の皆さまも、驚きいってござる」。

諸神「時に、今度の市中の演し物の飾り（デコレーションの張りばてなど）のなかで、金立神におかれては何れを良いと御覧なされますかな」。**金立**「町ごとに様々の工夫のなかで、ともかく雨に縁の深い趣向が手柄というもの。白山町の小野小町の歌『千早振る神も見まさば立騒ぎ天のと河の樋口あけたべ』に因んだ旅立ちには特によろしく、次にやっこ。それから竜宮・流鏑馬・鞍馬牛若の旅立ちは綺麗で宜しかった。材木町は町柄のせいかひときわ目立ち、西の方の町は特に優劣つけがたし。何れも宜しく、伊勢屋町は衣装が念入りでこの後も役立つことであろう」。

綾部八幡⁽¹³⁾「まず、そのような事は雑談のうちで、早魃問題は専一事項であるといっても、それは今現在のこと。またどのようにか工

一編舎十九と十返舎一九

夫いたしたら降雨もござろう。それより第一の肝要事は、アメリカとロシアの一件。皆々様、どのように思召されるか。今日の会議は、これが第一義の眼目でござる」。**諸神**「ごもっともと申したところで、私もは、みなみな郷の村氏神に過ぎませぬ。並びおります私らは村々のはやり病の心配をするていどの身の上で、そのような日本の一大事につきましては、どなたかお歴々の神々の合議にお任せ申す次第でござる」。

稲佐大明神「しかし普通の時ならばともかく、この節は身分の尊卑に限らず、銘々が思っていることを話さなくては見通しが立ちませぬ。もともと、異国征伐の一件は筑前箱崎八幡⁽¹⁴⁾の持前でござる。ご承知のとおり、門の額に『敵国降伏』と金文字で漢方薬⁽¹⁵⁾三臈田⁽¹⁶⁾の看板を見るように表向きに押出し堂々と金看板を懸けておられるので、まずはあの男が亭主役でござる。『昔、蒙古襲来の八万艘の船を神風で吹きとばし鎮静し申した』と、かねがね自慢話をいたしておられるではないか」。

諸神 小聲で「仰るとおり。しかしあの時は八月十五日でありまして考えをめぐらせば、高潮時の二百十日に該当し、全く八幡様ご一統の神風とばかりは思えませぬ。幸いに二百十日に当たり八幡一統の手柄と成ったものではござりませんか。ハハハハハ」。

小城 祇園社⁽¹⁵⁾「時に、天山の弁財天さんに川上の淀姫社さん⁽¹⁷⁾。御婦人ではありますが、お考えはござらぬか」。**弁天**「私もは女の神にございますれば、早魃の雨乞と仰っても、化粧水ほどのわずかな効果しかなく、どういたしましたところで、この早魃に私どもが雨を降らしましても何の役にもたちません。また、長崎表に來航した

ロシア艦隊のことは、ヨソワシカ（おそろしか）ことでございます。私どもは女神でどうにもできません。こればかりは男神さんたちの御検討しだいでございましょう」。

稲佐「あいちゃ、オランダ・中国人なども日本の女には金銀財宝を惜しまずと云います。淀さんとお二人で色目を使ってちよろりと御覧なされたら、どうしてどうして、おそろしいロシアも腰はヨロヨロとなびきましようわい、ハハハハハ」。弁天「稲さんのような仰りようはございませぬ、おかしな事ばかり。ホホホホ」。稲佐「時に伊勢社太神宮さま⁽¹⁸⁾。尊い貴方様は日本人の祖先神でございましょう。これまで大事な会議でありますのに最前から一言も御発言がなく、盲目の女芸人が尻をふったように上目蓋を閉じ、含み笑いをしていらいしゃるのはどのようなお考えでありますか。日本の一大事、尊い貴方様の御身分にも懸かることでありますのに。我々は皆それぞれに受持があり、云ってしまえば貴方様は御代官で、我々はほんの助役のようなものに過ぎませぬぞ」。

太神官「ハハハハハ。成程。蟹は甲羅に合わせ穴を掘ると申す。身分相応の御取沙汰に心積もり、承りましてござる。稲佐さん、貴方などは田舎神で、ようやくと白石三郷の鎮守の森といったところ世の中のこととはヌカ味噌の味も知らず、東は鳥栖の「轟木」⁽¹⁹⁾より向こうに行ったこともなく、わずか五艘か八艘の外国船が来たといつては百姓が人斬ったように大仰に騒ぎ立て、諸神と大評定するなどと触れ流しておられる。拙者などはこれくらいの船、屁とも感じませぬ。一通り、その経緯を申すによって、神々の衆、お聞きなされよ。まず、江戸表へアメリカの船四艘とやら来て、この節は長崎に

ロシアが同様に来て『ヤ、ヤ。船の長さが六十間、人が何百人。ヤヤ、火輪船⁽²⁰⁾とかいうのが何艘』と事喧しく人々は申し立てておる。さてもまた落着きのないことじゃ。たとえ何百艘参っても、これま

で日本の武威をもって異国の攻撃を防いでまいったことによって、今さら彼らがどんな仕掛けを凝らしても詮無いことであろうよ。この上は、いつそのこと船が一万艘も来るが良からう。よく、よく、お考えなされ。彼らの本国は、親交ある大都オランダ⁽²¹⁾同様の国であり、一万里に及ぶ遠海を乗りきって本国を離れ、航海の道のりが遠く船乗りが多ければ多いほど兵糧・運送に手詰まりが出て、とてもこのに半年も滞船はできないものである。戦わずして間もなく引取るのは目に見えており、もし滞船するとしても何の恐れることがあろうか。ただ恐れるべきは日本の兵が勝負を急ぎ、何としても海上で討ち取ろうとするから難しくなり、海上での勝負となると彼らの敵になりがたく味方の兵を損するだけである。そうこうしているうち時分を見計らい、火輪船をもって本船を誘導し、矢を射るように逃亡するときは、味方は『馬鹿が鉄砲を打ったよななもの』（弾がまったく当たらぬ）となる。よって、日本の海に面した地域は海岸からおよそ一里ばかりの範囲をしばらく彼らにゆだねることだ。彼ら持参の兵糧が不自由になつてくれば陸地上がって作物を荒らして乱暴に及ぶに違いないことは、鏡を見るように歴然としている。しばらく思いのままにさせておけば、彼らは次第に三丁入り五丁入りして本船を離れて貪るところを、かねて山かけや森かけに兵を揃えておき時分を見計らい、一瞬に打って出て、後ろを断ち切る。一万の兵ならば五千で応戦し、手軽な十駄目くらいの鉄砲に二、三駄目の

玉をいくつか込め散弾として用い、鎗隊の脇から三、四発厳しく打てば、どんなに彼らが目ざましく戦おうとついに本船との間が断ち切られて、一人も本船に帰ることは出来もしない。彼らは鉄砲にこそ物を言わせるものの、陸地に引揚げ、鎗や剣術でもって討取れば味方の必勝疑いがない。かえすがえすも恐れるのは、味方の兵が勝ちを急ぐと大敗の元となるということじゃ。とはいっても、当日本国はその手にのらず、長崎警護は古来、地理をよく承知し、伊王島・高島に石火矢（大砲）を備えて固めておる。なかでも新築になる必勝の御台場があるではござらぬか。白崎・千本の要衝に敵船を誘導すれば『袋の鼠』同然、しかしながら又、どのような戦術をもつて逃亡するかは計りたいものがある。第一に心得なければならぬのは、今のところは日本の武力を示す為であるから陣場そのほかを嚴重に固めるのみであるが、実戦となれば夜中の用心が肝要となる。御台場そのほか陣屋と表通りを幕で仕切り、兵員数の多少を見せないようにし、夜中は忍び提灯（俗に強盗提灯という）をもつて所用をなし高張差提灯は取りやめて、頭分の者（親頭）の居所を知らしめないようにし、すわココぞという時ひそかに一斉に高張差提灯を振り立てれば敵方はよく見え、味方の方は暗いままである。昔、赤穂城受け取りの節、脇坂の本陣は城外に嚴重に陣を張り夜は高張差提灯を昼のように煌々と照らしたのを見て、大石内蔵之助が城上よりその有様を眺めて『我輩この城を保持せんとするならば、今一丁の大砲があつたならば、あの本陣を木っ端微塵にできるものを』と云つたと聞く。それと同じく、灯りこそが敵の目印となることを、よく心得るべし』と。

一編舎十九と十返舎二九

このように伊勢太神官さまが言つて聞かせられたので、同席の諸神はどなたも聞きほれ、涎を流して感心しきりのていである。

稲佐其の外「さすが親玉。すべてすべて驚き入りました。伊勢太神官様のそのような軍慮があれば我々は安心。時に金立さん、貴方は昔、秦の始皇帝をだまくらかし、不老不死の薬取りに行くなどと偽り、秦国をすっぽり抜け出て、我が日本に数千年御在住じゃ。この節、異国の者どもが来て日本の一大事と御覧なされたら、また、薬取りに異国船と一緒にかの国に立ち退かれるお考えなどはござりませんか。どうも油断のならない先生だもんでう」。

金立 膝を立て直し「何ということか、仰いまするか。今一度承りたい。拙者が裏切りをなすかとお疑いの様子、場合によっては『稲佐（否、左様）』とは云わせぬぞ」と剣に手をかけ、迫つて言う……、皆々「稲佐ように（いや、そのように）お腹立ちなさいますな。これは当座の戯れでござる」と。皆々「ハハハハハハハハハハハハ」。

注

(1) 五日の風十日の雨：「論衡」（中国、後漢時代の思想書）に出てくる諺。三〇巻から成る。儒家の尚古思想を厳しく批判、迷信を排撃するなど、自由主義的批判精神・実証的態度にあふれている。

(2) 嘉永六年（一八五四）五月：明治天皇は前年の嘉永五年（一八五三）九月二十二日孝明天皇の第二皇子として誕生、慶応三年（一八六七）正月九日践祚。『明治天皇紀』「嘉永六年四月十九日」の条に「亜米利加合衆国東洋艦隊司令官マシュー・カルブレイス・ペリー、軍艦サスケエハナ、ミシシッピ、サラトガ、サップライ、カプリイスの五隻を率ゐて琉球に来る」

- に始まる詳細な記録がある。
- (3) アメリカ：嘉永六年五月二十六日、米国東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦四隻を率い琉球那覇に来航。六月十四日、軍艦二隻を率い小笠原に来航。七月八日浦賀に来航、七月一日久里浜に上陸し米大統領フィルモアの親書を幕府に接掛戸田氏栄に手交。七月二十日幕府ペリー来航を奏聞。七月二十六日ペリー貯炭所の建設・物品購入などを琉球政府に強要。七月二十七日、將軍徳川家慶死去。八月五日老中安部正弘、米国国書の返書に關し諸大名の意見を求める。
- (4) ロシア（おろしあ）：嘉永六年八月二十二日、プチャーチンの率いるロシア艦隊四隻長崎に来航。
- (5) 金立社（きんりゅうしゃ）：祭神は、保食神・弥都波女神・秦の徐福・天忍穂耳命。由緒は祭神の徐福は第七代孝靈天皇の時来朝して文化をもたらした秦人。金立社は、貞觀二年（八六〇）に従五位下に叙せられ、元慶八年（八八四）に従五位上に昇叙。古くから雨乞い・日乞いの神として崇敬されている。「鍋島直茂治藩以来本社の祭祀に重きを置かれ、社殿の造営祭費の供進は固より、山林田畑の神領を寄進せらる、されば早魃の年には祈雨の爲め親しく神前に祈願せられしこと屢にて、浮杯津下宮沖神島（ふばいつげぐうおきかんのしま）の御神幸は皆藩命によれりと云ふ」（『佐賀県神社誌要』）
- (6) 沖ノ島（おきのしま）：有明海に浮かぶ島。早魃になると、金立社の徐福神を奉戴し筑後川畔の諸富の浮盃まで行き、有明海へと船を出し、沖ノ島で浮立を奉納する風習があった。
- (7) 浮盃（ふばい）：筑後川沿い、諸富津の地名。
- (8) 修理田（しゆりだ）の山王社（さんのうしや）：祭神は大山咋神。
- (9) 白石（しろいし）の稲佐（いなさ）：祭神は天神・阿佐神・女神・聖王神・五十猛命。百済の聖明王と阿佐王子を祭ることで有名な神社。
- (10) 天地人の三ツが和合：知行合一（陽明学の根本義）の思想の暗喩か。天保八年（一八三七）、陽明学を修める大塩平八郎（一七九三—一八三七、大阪町奉行所与力。儒学者）の乱は、天保の飢饉に救済を町奉行に請うて聴かれなかったので蔵書を売り払って窮民を救い、幕政批判の兵を挙げたの

は十七年前のことであった。なお、徳川幕府は格物致知を基本とした朱子学を推奨していた。

- (11) 大鼓台の下に煙のように集まる：平安末期の歌謡集『梁塵秘抄』命名の由来に「こゑよく妙にして、他人のこゑおよびざりけり。きく者めで感じて、涙おさえへぬばかり也。うたひける声のひびきにうつばりのたちて、三日るざりければ、うつばりのちりの秘抄とはいふなるべし」とある類で、当代無比の絶妙な声を言う。
- (12) 徳川家慶様御逝去：徳川第十二代將軍、水野忠邦に命じて天保の改革を断行。嘉永六年（一八五三）七月二十七日歿、六十一歳。
- (13) 綾部八幡（あやべはちまん）：祭神は応神天皇・神功皇后・住吉大神・武内宿弥・級長津彦神・級長戸辺神。由緒は綾部郷の地頭藤原幸忠は源頼朝の奥州征伐の際一族を率いて従軍し軍功を立て、元久二年（一二〇五）鶴岡八幡宮を勧請して創建、社領百町を寄進した。天曆五年（九五二）この地方が暴風雨・山津波に襲われて大被害を受けた時、背振千坊の僧が九千部山頂で一万巻読経の請願を立てて殉じたことからこの社に風神を合祀した。七月十五日、旗を掲げて天候を占う「旗揚げ」行事が有名。門前町の産物に「綾部のばたもち」がある。
- (14) 筑前箱崎八幡：祭神は応神天皇・神功皇后・玉依姫命。由緒は神功皇后が筑紫蚊田の里で降誕されたとき、その胞衣を箱に納めて葦津浦に埋め、その印に松を植えた。
- (15) 小城（おぎ）の祇園社：花柴（一月）山挽祇園（六月）柿祇園（八月）の三大神事がとり行われ、特に山挽祇園は団扇祇園ともいわれ、起源は中世千葉氏の支配期にさかのぼる。
- (16) 天山の弁財天：天山の脊振神社上宮に「弁財天」が祀られている。脊振神社は神功皇后の三韓出兵のときに勧請され、航海安全を祈願して宗像三女神を祀り、のちに仏教伝来によって弁財天が降臨したと伝えられる。
- (17) 川上（かわかみ）の淀姫社（よどひめしや）：『肥前国風土記』に云う「与止日女社」。祭神は与止日女命。
- (18) 伊勢：祭神は天照大神。「藩祖直茂世継無きを憂ひ、大神に祈り一男子を挙げ、是即勝茂にして、幼名を伊勢松と云ひしも之かためなり。依て報賽

の爲め天正十九年（一五九一）十一月十一日土地高燥清浄の此の地を相し、社殿を建築し祭田を附し、神職を置き以て朝夕奉仕せしめ」（『佐賀県神社誌要』）と、伝えられている。

(19) 鳥栖（とす）の轟（とどろき）：江戸期の鳥栖は、対馬藩田代領と佐賀鍋島藩領とで成っていたが、轟は佐賀藩領にあり、佐賀藩の最東方に当たる。

(20) 火輪船（ひなわせん）：蒸気船。日本でも幕末から明治にかけて用いられていた。蒸気車は「火輪車」と言った。開化都都逸に「恋の重荷を車に乗せて胸で火を焚く陸蒸気」などがある。

(21) 大都オランダ：江戸時代の鎖国政策下において、異国船の出入りがゆるされていたのは唐船（中国船）とオランダ船のみで、唐船は春、夏、秋に計一〇艘。オランダ船は夏に二艘を限度としていた。長崎の出島にはオランダ商館が設置されていた。

(22) 長崎警護：黒田藩と鍋島藩が当たっていた。

(23) 赤穂城受け取り：幕府の収城使・龍野藩主、脇坂淡路守が大手門から四千五百人、備中足守の城主、木下肥後守が塩屋門から千五百人の軍勢を引きつれて入城したことをさす。

「松の廊下の刃傷」（元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使接待役の播州赤穂城主浅野内匠頭長矩は、指南役の吉良上野介義央の度重なる意地悪に我慢の限度もこれまで、と江戸城松の廊下で刃傷に及んだが、幕臣の梶川与惣兵衛に抱きとめられて目的を果たせず、かえって將軍の怒りに触れて内匠頭は切腹、浅野家は断絶、赤穂城は没取されたが上野介は何のお咎めもなかった）を受けて、筆頭家老・大石内蔵助良雄は「藩士総登城大評定」（主君内匠頭の切腹、江戸藩邸の受渡しなどの凶報に大石内蔵助は藩士二七〇人余りに総登城を命じ十九、二十、二十一日の三日間、さらに二十七、二十八、二十九日と城中大広間で大評定が行われた。籠城説、復讐説、開場殉死嘆願説など連日にわたって議論がなされ、結局無血開城ということになったが、内蔵助に従う者は六〇人余りにすぎなかった）を行い、「赤穂城受け渡し」（四月十四日、幕府の収城使を迎え、赤穂城はここに受け渡された。内蔵助は三代五十七年間の城に名残を惜しみつつ清水門より退出していった）となった。

(24) 秦の始皇帝：金立神社の祭神の石柱は、徐福とされており、秦の始皇帝の命により不老不死の薬を求めて東方日本にやってきたとされる徐福伝説を挿入している科白。

十返舎一九（じっぺんしゃいっく）の略歴

駿府に武家の子として明和二年（一七六五）に生まれ、天保二年（一八三一）没。享年六十七歳。本名重田貞一、通称与七。江戸で大名に仕えていたとされるがまもなく浪人。二十三歳ころには大阪で町奉行小田切土佐守に仕え、それも致仕。

その後は大阪で浄瑠璃修業。寛政六年（一七九四）江戸葛屋の食客となり、挿絵描きを手伝っているうちに黄表紙『心学時計草』を發表。さらに、洒落本、滑稽本、合巻、人情本、読本、噺本、往来物と多くの分野で活躍。生涯に五八〇種に達する作品をなした。享和二年（一八〇二）滑稽本『東海道中膝栗毛』初編を發表するや大好评を得、二十一年間にわたって書き継ぐ。

初めの筆名は十遍舎一九であったが、他に十偏者、十偏斎、重田一九斎などを用い、享和ころから十返舎一九に定まった。十返舎は嗜んでいた香道の「十返しの香」（名香は十遍焚いても香を失わない）に因み、一九は幼名市九による。

近年著された十返舎一九の伝記に、松井今朝子『そろそろ旅に』（講談社、二〇〇八年）がある。小説仕立てのためフィクションは含まれるものの秀逸な評伝となっている。

「虫看鑑野辺若草」は三十一歳、寛政八年（一七九六）に草された初期作品であるため筆名は十返舎一九とすべきであるが、本稿では一般的に知られている十返舎一九とした。

辞世は「この世をば どりやお暇いとまと 線香の煙と共に 灰左様なら」の狂歌であった。

虫看鑑野辺若草（むしみるかがみのべのわかくさ）

十返舎一九

序

シャクトリ虫が身を縮めるのは大きく伸びたい一心からである。

「一寸の虫にも五分の魂」と云う。ちつぽけな虫でも五分の魂にかけて念じればついには天に登る機会さえあるのだ。「ミミズの木登り・ハエの力持ち」などとはありようもない譬えに使うのだが、これも柳に飛びつく蛙のようなもので実現することがあるかもしれない。だから、蛇をつかって（怠けて）^① いてはいけない。怠けるならアブラムシと大した変りはないであろう。^②

花に鳴く鶯、水に住む蛙まで歌を詠むものと、住吉明神が太平楽で言ったのは満更嘘ではない。此処に、六玉川③の中でも名高い井出の玉川④に住む蛙がいて、この蛙、歌道・香道、ほかにも和漢の文芸に明るく、そのうえ武道も心がけるものだから、時折、高野⑤などにも遠出するという。

ある日、人影のない野原のはずれを帰っていると、由緒ありげな庵を見つけた。庵からは爪音の調べが漏れてまいり、近づいてみる

と妙なる声も聞こえてまいるではないか。その声のしおらしさ、蛙はしきりに心動かされて、「さて、さて、奥ゆかしい庵のうちには、さだめて美しい方が住んでおられよう。何にしても田舎さびたところに珍しい様子であることよ」と感嘆しきりであった。それで、案内を請うて庵の中に入ってみると、声のよろしいことは当たり前、蚯蚓みみずの住みかで、二八、十六歳ばかりの美しくふつくらとした娘がおった。

馬おい虫（バツタ）「仲人役をするのは当たり前さ、」へト書きンデンデンムシもするのかな。

へト書き おそらく、この歌声はどうやら美しい嫁入り前の娘と思われる。

それからというもの、井出の蛙はかの蚯蚓の音色のしおらしさに夢中になり、度々庵に立ち寄り、ついには深い恋仲と相成った。蚯蚓も蛙の色男ぶりに興味津々、双方ともに親の目をしのび逢引をするようになったとき。ところで、この蚯蚓にはかねてより許婚があり、それは蛇であった。蛇は不粹者だもので娘の気にならず、段々と祝言も延び延びになっておったとき。蛇は執念深い奴であるから、もしや外に色男でもできたのではないかと忍び入ったところ、この逢引きを見つけたから、さあ大変。激怒し、すぐに二人を並べ手打ちにいたそうと思ったものの、いやいやそれでは後で難儀が押し寄せてくるかもしれない、今、バツチリ頭に浮かんだ方法がある、今に思い知らせてやるから覚えてやがれと、その夜はただこそそと立ち帰りましたとき。

蛙「びよんびよん跳ぶのがカエルの性分で、いつもオイラは飛び

つきたいほど深く思っているのに、お前の心は土の中を這い回る蚯蚓のように鈍く困ってしまう」。

蚯蚓「わたしのことよりも、蛙の顔に小便とか蚯蚓とか言うのではないかな。わつちばかりがどのように思ったところで、お前さんはいつもイケシヤアシヤアとしていなさるから、いっそう、こつちが焦れつたくなってならない」。

蛇「へ蛇の道はへび」といように、ジャの道を知るオレだって言うのに、お前らのイチヤツキを知らないとも思っているのか、厚かましい奴らじゃ」。

蛙もさすがによそ目をはばかりと毎夜は通えず、蚯蚓は一晩でも逢わないと苦しくて堪らないので今夜は蛙のもとにこちらから忍んでいくと、折も折、蛇がその道筋に通じかかったということじゃ。蚯蚓がクネクネとのたくった跡が白くなっているの、その足跡をつけてゆくと、蛙の屋敷内であったとき。足跡を掻き落として入ったような証拠もあり、蛇は直ぐに蛙館に踏み込んで、一口上、弁じようと大いにせき込みましてござる。

蜂「オラが旦那を先に登場させるとは、ほんとうにへびを使う意けものというもんだ」。

蛇「なあに、雨蛙の五匹や十四、旦那の口にかけてとたった一呑み、ぬらりくらりと手延びになさることはござりませぬ」。

蛇「この足跡こそ不義密通の証拠、自らの手を下さずして蚯蚓と蛙の中を引き裂くも今宵のうちよ。家来ども、抜かるでないぞ」。

家来「抜かるまい為の提灯をつけたようなはつきりした道（蚯蚓の足跡のこと）は、それほどはつきりはしておりません」。

一編舎十九と十返舎一九

へト書き 蛇の家来の蜂助に蛇平、ともども焚きつける。

蛇「雨上りの蚯蚓でなくては、このように塗たくった跡の付くものは他にはあるめえ。こりや、黙ってはいられませぬ」。

蛙の方では思いも寄らず、蛇にのたくりこまれ、蚯蚓も抗弁して「途中で病気がさしおこり、仕方なく蛙屋敷に立ち寄り養生いたしてるところでございます」と嘘八百並べ立てるが、蛇がその手を食うはずがない。「蚯蚓の方から蛙の方まで足跡の付いているのが論より証拠、わざわざこの家に来たことに疑いはない。もとよりオレ様と蚯蚓は許婚であるから、蛙は間男となる按配だ。二人ともに覚悟せよ」

と、蛇が脅しますれば、蛙も蚯蚓も一呑みにされる心地がして、大いに意気消沈いたしました。折も折、手水鉢の陰で様子を盗み聞きしていたナメクジがまかりいで、「その足跡は私メの足跡であります。蚯蚓を奪って逃走している途中で取り逃がしてしまい、蛙の方に駆け込んだようなので此処まで追っかけてきたところであります。ただいまの蛙殿の難儀を見かね、拙者の不埒をありていに申す次第。足跡の付いたのは拙者の天命が尽きたも同じこと。どのようにも処分をなさってくださいませ」と二人の難儀を助け、ナメクジは惨々に打ち据えられましてござる。

ナメクジ「我らナメクジが、禪を引きずった跡を蚯蚓の塗たくった跡などとは、いやはや、とんだ合点違いだわい」。

蛇「うまく追い詰めたものを、ナメクジ野郎が出しゃばりやがって、しくじった。忌々しいことよ」。

へト書き 蛇はようやつと追い詰めたものを、みすみす見逃すこと

になりナメクジに理の当然とばかりに言い伏せられ、大いにへこんでしまった。

蜂「きりきり舞いしてトズラしようと思っても、すぐには埒のあかない歩きようだわい」。

盗人が昼寝できるのも夜稼ぎに当てがあつたのこと。ナメクジめが、蛙と蚯蚓の災難を助けたのは、実は蚯蚓に気があつたからにすぎない。ある夜、ナメクジはひそかに蚯蚓の寝所に忍び込み心の丈を述べて口説いたけれども、もとより蚯蚓は蛙と相惚れの仲であるから、何のかんのとナメクジをなだめすかして其の場を切り抜けていたのでござる。

ナメクジ「これ、これ。野暮を言うんじゃないよ。清水きよみづの舞台ならぬ、蚯蚓みみずの舞台から落つこちたと思つて、オイラの気持ちも叶えてください。ほれほれ、(漢方薬で) ナメクジは声の薬だというから。夫婦になつたら、お前さんの声がもっと好くなるだろうよ」。



蚯蚓「お志は嬉しゅうございますが、どうか、こればかりはお許しなされませ」と、声を震わせて泣いたこととござつた。

蛇はナメクジめにけちをつけられたので、蛙が通う道筋に待ち伏せ蛙をつかまえ、蛙に蚯蚓の事を思い切れと色々にひどく責めたのだが、蛙は覚えないことと知らばつくれ、固く包み隠したので蛇には今更これという証拠はないからして、そのまま蛙を見逃すほかなかつたのでござる。真正正銘の蛇でありますれば、一呑みに呑んでしまふところだが、其処はしがな草双紙の話であるだけに、助けられたのである。

蛇「蛙め、水責めにあつても、いけしやあしやあ平然としている

面憎さ」。

へト書き 蛇「サア、これでも知らんというのか、思い切らないのか。どうだ、どうだ」。

ある時、蛇の家来の蜂助と虻平が、蛙の家来の田楽虫(デンデンムシ)に出食わした。蚯蚓が蛙に届ける返事の文箱を持っていたので、それを見つけたや、わざと酒などを振舞い蜂助は喧嘩をしかけて、デンデンムシの文箱をひったくつた。デンデンムシは渡すものと競りあうものの虻平が飛びかかってデンデンムシを大げさに斬り倒し、とうとう証拠の恋文を取ったぞーと大いによろこんでいたところ、折から、仲間の螢がそこを通りかかった。螢に出会つたのを幸いに、尻をまくらせ灯りを付けさせて文箱を開けて見ますれば、その文言たるや   これぞ蚯蚓の塗たくつた奴であつた。何だかんだかサツパリ判らない何の証拠にもならない代物で、忌々しい限りだわい。

デンデンムシ「その文箱を捕られては、帰って旦那に言訳が出来ない。しかし、殺されてしまえば旦那の元に帰る気遣いもいらぬか。それならば、文箱は勝手にしやがれてえもんだ。ガア、ガア、もう一つ返してくれ」(デンデンムシの苦しみながら無意識の言葉へト書き) 息が切れる(気絶する)。

蜂「ポンとやられると大騒ぎだ。証拠となるはずの此一通、見れども見えず。聞けども分ならず」。

へト書き 家来ども、そのことの仔細を知らず。

このような折柄、井出の蛙は慕ひまがえる蛙と連れ立って、デンデンムシの帰りが遅いもので迎えがてら出かけて来たところ、蛇と蜂とが蚯蚓

の恋文を螢の尻にさしつけて読んでおったので、蟪蛙は咄嗟に虻平と蜂助を取って押さえ、「さては、お前ら、この恋文を奪い取ったのじゃな。不届な輩よ」と踏み倒しましたのでござる。そうなりますれば、へ虻蜂取らずの諺にかこつけて「虻も取らず、蜂も取らず」
 「螢の仕業であるよ」と罪をなすりつけられるものだから、螢は一散に草の中に隠れたそう。けれども、もともと尻が光っておるもので、ついには蛙に見つけられ生捕りにされたそう。虻と蜂はブンブンうるさくわめいて蟪蛙を刺すのであったが、ついには逃亡し、行方不明となったそう。

一 螢 「忌々しい限りじゃ。こんな時は越中禪なんぞを締めていたら尻が隠れて好かったのになあ。ありや、また、尻が光ってならんわいなあ、ありやさ、また光った」。

へト書き「ココマデ御座れ 甘酒しんじょ」

へト書き「何にも知らぬホタル一人が、ぶつちめられて、とうとうホタル籠にいられ糾明させられる。これがほんとの無実の難、「鳴かぬ螢が身を焦がす」とは、このようなことをいうのであろう。

蜂 「螢さんよ、あなたは夜の日雇い人(夜、足で踏むマッサージ?)ではござらぬか。踏むことが上手だ、恨み恋のないように一緒にお踏みなされませ」

蚯蚓 「男は左からというから、蜂さんの方から先にお踏みなされませ」

さてさて、蚯蚓と蛙は何処かへ連れ立ち駆落ちしてしまったので蛇は一心に蚯蚓を恋慕い、此の頃というものは恋煩いになってしまい瘦せ衰え、ただ一人穴の中に引きこもり、北岩倉の草原(京都

一編舎十九と十返舎一九

の地名) というような身に成りはて、ただ蚯蚓のこのみ思い暮している。

蛙は蚯蚓と連立って去っていったが、追手が厳しく追いかけてくるので、準備していた葛籠つづらの中に蚯蚓を忍ばせ葛籠を背負い、やっそこさ逃げのびていった。とある庵をみつけ、ここで一夜を明かそうと思いつき、まさか蛇の住処とは知らずに案内を乞うたのである。蛙 「ごめんください。此穴は、どなたのお住まいでござろう。何にいたしても、一夜の宿を明かそう」。

蛇 「誰かいな。夜中しめている門を叩くのは」。

へト書き「宵の約束がない者には、けして開けないよ」など言っている。

へト書き「そのように人を焦らせる奴さ」。

蛇は蛙が背負ってきた葛籠の中身に合点がいかないと、蛙を何の苦もなく追い散らし、葛籠の紐を引き切り、蓋を取り除ければ、案の定、蚯蚓がのたくりまわっていたというので、やっぱりじゃわいと蛇は、思い焦がれていたことではあるので大いに喜び、蚯蚓を付回しては口説きますが、蚯蚓はもとより嫌っていたのですから承知するはずもございません。そうなると、蛇はいよいよ熱くなって、ただ一呑みにするだけだと鎌首をもたげて追いかけて回します。もう危ないと見えたところに、ナメクジが蚯蚓の跡を慕ってやってきて、「此の庵のうちで、蚯蚓の鳴く声が聞こえるのは不審だぞ」と、庵のうちに飛んで入り、蛇を引き除け、蚯蚓を伴い立ち去りましてございます。いくら蛇でもナメクジには叶いませぬ、手出しでもしたら、たちまちに蛇は溶けてしまうのでありますから。目の前

で、みすみす蚯蚓を盗られてしまったのであります。

蛇「エエイ、せっかく手に入れたものを、また逃がしてしまったわいな。残念無念、誰か取っ捕まえてくれろ。アレー、泥棒じゃ、泥棒じゃ」

ナメクジ「ヤイ、べらぼうめ。蚯蚓を連れてゆくが、止めてみたらどうだ。どうしてお前らに歯がたつものか。ハレ、好いぎまだ、ハハハハ」

ナメクジは思いのままに蚯蚓を手に入れ立ち退きました。蛙は、恐ろしい蛇のところから逃げ去ってはいたのだが、蚯蚓のことが気がかりでいたところ、またまた帰る途中でナメクジに行き会い、何の苦労もなく蚯蚓を取り戻した。ナメクジは、蛇に会っては大丈夫だけれど蛙に出会ってはまったく苦手なものだから、こそこそ逃げ帰りましたことです。

此処に年久しく住みますアリの庄屋殿が居られました。どういう縁なのか、蟻の庄屋殿は蚯蚓の叔父さんでございまして、蛙と蚯蚓を我が家に引き取りあれこれ二人に意見して、まず蛙は親元に返し、蚯蚓には「許婚のある身であるからには、一旦、三日だけでも蛇のもとに行かねばなるまいよ、蛙のことは思い切れ」と、ただ正直一辺の考えで意見をいたしました。

蚯蚓「ナメクジさんは、それはそれは嫌な相手。そこでお前さんに会うなんて、地獄で仏に会ったようなもんじゃわいな」。

蛙「ヤイ、べらぼうめ。蚯蚓を連れて行くが、止めてみぬか。どうしてお前などに歯が立つものか、好いぎまだ、ハハハハ」

へト書きと、ナメクジが蛇に言ったとおりの鸚鵡返しにまくし立

てられるものだから、忌々しくてならない。

ナメクジ「捕ったものを捕って、また捕り返された。ここに蛇が来るとまた狂言が後戻りすることになる」。

蟻「年寄は悪いことは言わぬ。蛇どのに嫁入りしやんせ、うんと返事しやんせ。蚯蚓、お前さんのように、簡単に一口で事は片付かないものだから、まあ、私に任せなさい」

蚯蚓はあれやこれやと思いをめぐらしていると、「みんな、私から起こった虫仲間の騒動だけれど、やっぱり蛇の方に行くのは嫌じゃわいのう。蛙と添うこともならないならば、死ぬよりほかに道はないわ」と。或夜、蟻叔父さんのお宅をしのびでて、行く先も定めず、虫の声も絶え絶えな野原に打ちふして、親のことや蛙のことを思いだすと今更ながら未練が生じて死ぬに死ねず、土に食らいつき泣いていると、不思議や不思議。大空に紫の雲がたなびいて、阿弥陀如来様があらわれたのである。

阿弥陀如来「昔々、蚯蚓よ、そなたは我に申したことがあったよのう。私どもは何を食して生きてまいったら宜しいでしょうか、と。我は答えていった。土を食っていけば宜しい、土を食い尽くしてしまつたならばどうするか。その時は、大地に出て、我の迎えを待つが宜しい、と。お前は女と生まれて罪深い身の上であるが、この汚い世を見限つて今や死に急いでおる。もとより、お前の寿命はこれまでじゃ。夜が明けたらば、天道様の光に照らされて、大道で潔く往生を遂げたら宜しい。お前の未来は、我々が承知して救つてやることだから、疑うでない」。

そうして、フツと掻き消すようにはなく、そろそろとお姿をお

隠しになった。

如來「そなたが美しいから、何か俺が鼻頂でもするようで悪いが、これはオイラの役目だから、往生尽くめで送ってやる。心配はするでないわいなあ」。

さてさて、蚯蚓は阿弥陀如來様のお示しが有難く、ついに朝日に照らされ干からびて死んでしまった。蟻叔父さんの方では、姪っこの蚯蚓の行方がわからなくなったことを深く嘆いており、「ひたすら蛙を思い切らせようとしたのは、まことに無理な料簡であつたかもしれない。ひっそり家出した姪っこはおそらく川にでも身投げするつもりであろう、早く捜しだすほかあるまい」と大慌て。手下の蟻どもに言付け、手分けして捜させると、一匹の蟻が戻って報告するには、「蚯蚓が干からびて倒れていたのを見つけた」と。それこそは尋ね人の蚯蚓にちがひあるまいと、蟻の庄屋殿を筆頭に、我も我もと穴のうちより這い出し駆けつける蟻一味。そもそも蟻は虫偏に義と書くほどに義理堅い虫。庄屋殿の差配のもと、ひとつ穴に住む長屋中の蟻が申し合せて、棒やら縄やらそれぞれに持ち出して、大勢かかつて蚯蚓の死骸を穴の中に引つ張り込むという按配。

蟻一味は、庄屋殿の手前もあり洒落こむ者は一人とてなく、こちらが殊勝な性分というものだ。「さてさて、若死にしてあたら命を」と惜しみ惜しみ、行儀正しく一人一人穴より這いでてしおらしい行列である。

物の道理を知らぬ者を「虫けらにも劣る」というが、この世界では非道な者を「人間にも劣る」というそである。蚯蚓の死骸は蟻の穴に引き取り、ねんごろに巾いをして葬り、卒塔婆を建てて目印

一編舎十九と十返舎一九

としたということだ。蛙はこの事を聞くと深く嘆き、「詰まらない私のせいで、このような最期を遂げさせてしまい、まことに不憫なこよ」と、朝夕蚯蚓の墓におまいりし、黄檗きはだの葉っぱに諸々の供え物をして巾いをなしたということだ。このように心意気は虫とはいっても、その殊勝さは誠に清少納言が言ったとおり、「虫のすだく音には心無き人も、ものあわれを知る」というのはもつともなことである。

蛙「たとえ、この世では縁薄くとも、未来は極楽の溝のうちで、ひとつせせなぎの住まいをしよう。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
「古池や蛙飛び込む水の音、などという芭蕉めくが、今こそ、我が身の上に思い当たった」と、蛙はさすがに歌を詠むものである。

蚯蚓が死去した後も、蛇、蛙、ナメクジはそれぞれに遺恨止みがなく、何時か何処かで恨みを晴らしてやると思い暮らしていたのであるが、ある時、三人はばったり出会うことがあった。互いに敵討ちは望むところである。おのおの恋の仇討ちである。蛙は蛇が蚯蚓を奪ったことを無念に思い、蛇はナメクジにしてやられたと口惜しがり、ナメクジはやつと手に入れた蚯蚓を蛙に盗られたと恨み骨髄。逃さぬぞと互いに大捕り物の報復合戦。

そこへ、作者一九がゲンシツモ（不詳）のようなものを引つさげて割って入る。「もはやこの草双紙も終わりのころになってきて、目出度く収めねばならぬところに、また斬つたり張つたりとは何事ぞ。

この喧嘩、俺がもらった」と急に三人の中へ仕切りを入れて、引き分けとし、「放っておけば、みな互いに溶けてしまっではないか、まんざら見殺しにはできないのでなあ」と作者が出現し、まん丸くこ

の場をおさめることと相成った。

蛇 「長いものには巻かれろって云うじゃないか、覚悟しろい」

蛙 「蛙合戦の場所でなければ捨てぬ命、お前らの相手になるのは有難いと思え」。

ナメクジ 「蛙の子は蛙になると、親に劣らぬ力弥こそは大バカものとは本草紙によくいったものだ」。

作者一九 「もうもう、お互いに言いつこなし。これから俺の家で仲直りをしよう。そこで此物語の終わりがきまったというもんだ。これでまた目出度くなけりや仕様がねえ」

大判事キヨスマが云うことには「親子兄弟とそれぞれの名前を付けるのは人間の私である」と。なるほど天地から見るときは、同じ世界に沸いた虫に過ぎない。その虫という証拠を細かく云うならば、まず私であるよ。何故って聞くのかい。まずもって、こんな面白くない作品は、蔵の壁に書いてある落書絵みたいに書き散らしたものだ。それを好いだらうと押し売りするような代物にすぎず、いい虫だとお笑いなさるでしょう。米を食う虫は、何ともキモガイイ（不詳）。

まず、此草双紙もどうやらこうやらお茶を濁した、目出度し、目出度し。

注

(1) へびを使つて…なすことなく怠けて過す

(2) あぶらむし…(畑の油虫) 人につきまとい、ただで見物する、など人に嫌われるものたとえに使われる)

(3) 六玉川：むたまがわ。全国でも有名な六つの玉川

(4) 井出の玉川：京都の南郊の地名

(5) 高野：京都の地名

おわりに

一編舎十九「異船早魃神評定」は、佐賀藩内の神々が参集して早魃対策と外国軍艦来航の二大事件を交々評定するという想定となっている。嘉永六年(一八五三)、アメリカからペリー提督が親書を持って来航しロシアからはプチャーチン使節が長崎に入港し將軍徳川家慶は死去するといった時期の、外憂内患を背景に草された作品である。

異国船来航について、かつて、一編舎十九こと蒲原大蔵には痛恨事があった。文化五年(一八〇八)に起こったフェートン号事件である。当時、長崎出島での貿易を独占していたオランダは、イギリスとは交戦中でフランスの支配下にあった。東南アジアの植民地はフランスに敵対するイギリスに占領されており、イギリスのフェートン号はオランダ船捕獲の目的で来航したのである。鎖国政策をとっていた日本がイギリスの軍艦を寄航させたという失態の責めを負って長崎奉行松平康英は切腹、さらに長崎警備担当の佐賀藩も怠慢を責められて第九代藩主鍋島齊直に閉門百日が下され、大蔵の養父は自刃、大蔵自身も致仕を余儀なくされるといふ、上に下への大事件だったのである。

その後、大蔵は再出仕し家老に次ぐ着座にまで登り詰めるが、文

化文政期は全国的な財政逼迫・自然災害にあえいでおり、佐賀藩も例外ではなかった。そのような期間であるにもかかわらず、大蔵は藩より二度にわたって計七十石の加増を受け二百石取りとなっていた。これは彼の執務手腕に対する処遇であり、藩主斉直の有能なブレインであったことを物語っている。

「異船早魃神評定」には、そういった大蔵の経歴を語ってやまないものがある。かつて藩政に辣腕を揮っていた大蔵の力量をもってすると、嘉永六年の難事にも緻密な対応策が編みだされたはずである。しかし、すでに古希七十歳を迎えていた大蔵は現役中ならば切齒扼腕したであろう困難を、洒落のめした筆遣いで、痛快な作品に仕立て上げた。楽々の隠居然としているというよりも、乱世における一つの見事な「隠遁」の姿が、本作品には窺える。

一編舎十九を名乗った大蔵の作品は単なる戯作本には終らない。何れにも痛烈な社会時評が含まれ、ブラックユーモアに富み、読み手に快哉を叫ばせたり溜飲を下げさせたりする「種」が仕込まれている。今の世であるならば、定めし辛口の「時事評論家」として名を馳せ警鐘を鳴らし得るであろう。とはいっても、彼はそういった世俗的野心には程遠い位地にあり、この立脚点こそが彼の「面目」である。筆一本に懸け、隠遁の日々を「葉隠武士」として生き抜いた姿は、凛々しい。

一方、十返舎一九の作品は政治向きには一定の距離が置かれ、「虫看鑑野辺若草」にいたっては近現代の児童文学に通じる作品となっている。本作品は、カエルとミミズが恋仲とされている。しかし、ミミズにはかねてより許婚のヘビがおり、そこにハチ・アブ・ナメ

一編舎十九と十返舎一九

クジ・デンデンムシ・ホタルやらが登場して、恋合戦に加担するという筋立てである。これは昔話の「蚯蚓と土」「蚯蚓と蛇と眼交換」の由来譚に題材を得て、大がかりな物語化をはかったものである。

一般に、日本近代の児童文学は巖谷小波が明治二十四年に発表した「こがね丸」に始まるとされている。あらずじは、こがね丸という犬が鶯郎という犬の協力で父月丸を殺したトラやキツネを討つという仇討物語である。明治期の「こがね丸」ですら教訓臭から抜けきれないのに対し、これより九十五年前に草された「虫看鑑野辺若草」は異類譚を活かしきり、独立した文芸作品となっていることが特長である。さらに、室町時代から江戸前期にかけて作られた「御伽草子」とはまた異なった作品意識も窺え、作者が「虫看鑑野辺若草」の読み手に子供を想定したと思えないものは残るものの、児童文学史上において新たな地平を開拓していたことは指摘できる。十返舎一九も一編舎十九も武士の出であり、かつては刀を取った身である。江戸後期、二本差しを置いた二人の筆法は正眼の構えをとることはなくとも、オドケに冴えた切れ味を見せ、乱世における痛快な存在となりえている。

参考文献

- 『鍋島直正公伝』（侯爵鍋島家編纂所、大正九年）
- 『佐賀県神社誌要』（佐賀県神職会、大正十五年）
- 『明治天皇紀』（宮内庁、昭和四十三年）
- 『日本昔話辞典』（弘文堂、昭和五十二年）
- 『日本昔話大成 第一巻 動物昔話』（角川書店、昭和五十四年）

関連略年譜

- 寛政十二年 1800
 - 伊東玄朴 神崎仁比山村に生まれる
- 文化三年 1806
 - ナポレオン、オランダをフランスに併吞
- 文化五年 1808
 - 八月十五日 イギリス軍艦「フェートン号」入港 十六日 出港
 - 出島オランダ商館長ヘンデレキ・ドウフ 長崎奉行松平図書頭康英（十七日自刃） 佐賀藩主鍋島斉直閉門百日
- 文化八年 1812
 - ロシア軍艦、蝦夷利尻島に來航、南部兵撃退
- 文化十一年 1814
 - 鍋島直正誕生
- 文政元年 1818
 - イギリス軍艦浦賀に來航
- 文政五年 1822
 - シーボルト、長崎で蘭学を教授
- 文政八年 1825
 - 佐賀藩の内廷破綻、責めを負い有田権之充・納富十右衛門切腹
- 文政九年 1826
 - シーボルト、江戸に赴く。伊東玄朴ら従う
- 文政十年 1827
 - 佐賀藩の中牟田三左衛門、経済策失政の責めを負い切腹
- 文政十一年 1828
 - 台風襲来。佐賀藩は米穀払底のあまり困米を払い下げ、献米の収納中止
 - 伊東玄朴、高橋作左衛門の獄に連累して幕府の詰問を受ける
- 文政十二年 1829
 - 鍋島直正元服
- 天保元年 1830

- 鍋島直正、家斉將軍に謁見し家督の礼を修める。直正長崎巡視、藩内の寺社に参拝、前年台風襲来の罹災民を督励
- 天保四年 1833
 - 関東大風雨、米価暴騰
- 天保六年 1835
 - 佐賀城二ノ丸より失火、焼失
- 天保八年 1837
 - 三月二十七日、大塩平八郎自刃
 - 四月二日、將軍職に徳川家慶
 - アメリカ船モリソン号浦賀來航、砲撃
- 天保九年 1838
 - 唐津で百姓一揆 佐賀藩も鎮圧に赴く
- 天保十年 1839
 - 前藩主鍋島斉直死去。唐津の百姓一揆再燃
- 天保十三年 1842
 - 紅毛船長崎入港、支那動乱のみぎり警戒に務める。アヘン戦争終結。
- 弘化元年 1844
 - フランス軍艦琉球連天港に來航、交易・貿易・布教の三条を請う。琉球王辞して許さず
 - 幕府、海岸防禦掛を置く
- 弘化三年 1846
 - 仁孝天皇崩御。イギリス艦、フランス艦琉球に來航。アメリカ軍艦浦賀に到り、開国を要求
 - 薩摩藩イギリス・フランスの琉球渡來を説き、対琉球貿易の許可を得る
- フランス軍艦長崎に入港し、捕鯨船への砲撃を非難
- 弘化四年 1847
 - 幕府諸藩に江戸近海の守備を命じ、浦賀奉行へ外船接遇には穏和の態度を持すべしと命じる
- 嘉永二年 1849
 - 長崎にアメリカ艦渡來し、津軽海峡で遭難した同国人の引渡しを要請

イギリス軍艦浦賀付近に到り奉行への面会を要請
嘉永三年 1850

長崎入港のオランダ船、イギリス・アメリカに貿易請願のため軍艦を日本へ派遣する意志のあることを告げる

嘉永六年 1853

六月三日 相模国城ヶ島沖合にアメリカ遣日使節マッテウ・セ・ペルリ出現
蒸気艦「サスケエハナ号」(3500t)「ミシシッピー号」(1700t)
帆船「プリスマ号」「サラトガ号」

夜九時発砲 四日明方発砲 六日蒸気艦1艘江戸湾に進入

六月九日 久里浜でアメリカ大統領ミラルド・ヒルモウレの親書受け取り
300人上陸 13発の砲声 楽隊演奏

「日米友好・通商開始・食料石炭の供給・漂流民の保護」

浦賀奉行：戸田伊豆守、井戸石見守 2168人の兵 軍船200艘

六月十二日 出航

狂歌「泰平のねむりをさます正喜撰 たつた四はいで夜もねむれず」が囃される(正喜撰：上質の茶)

六月二十二日 將軍徳川家慶死去

七月十七日 長崎野母崎遠見番がロシア艦4隻発見 蒸気船2隻 帆船2隻

七月十八日 高鈴島に投碇 使節はプチャーチン

藩兵1万、台場に40挺の大砲 長崎から祝島(伊王島)22キロに松明・篝火海上に各藩の軍船が家紋幟に高提灯

七月二十六日 1隻出帆 二十九日 運送船出帆

八月三日 幕府方下知 ロシア使節の書簡受領許可

八月十九日 プチャーチン大型ボート7艘に随員13名警護兵37名で上陸(駕籠に乗り西役所へ。靴の上から白い大きな足袋を履かせられ畳に上る。卓袱料理をすすめられるが挨拶が先であると辞退、料理は食はず「国書」を渡す)
長崎奉行は大沢豊後守

十二月 再入港(幕政の老中首座は福山藩主阿部正弘)

幕府からの使者は留守居役筒井肥前守政憲、勘定奉行は川路左衛門尉聖謨
樺太の国境設定を測地後に定める

和親通商条約の締結は朝廷の許可を得、各藩と評議

謝辞

一 編舎十九を巷間に問う偉業を成しとげられた佐賀県立図書館近世資料編さん室と、田中道雄佐賀大学名誉教授に深甚の敬意を表します。また、近世資料編さん室各位に御協力を、田中道雄名誉教授には現代語訳の添削を賜りました。記して謝辞といたします。